様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：８２６１９
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６２８２０７４

研究課題名（和文）海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Research on Perceptions of Japan in Overseas Exhibitions of Japanese Art Ranging from Prehistory to the Pre-Modern Period

研究代表者
鬼頭　智美（KITO, SATOMI）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・室長

研究者番号：８０３２１５５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,100,000円

研究成果の概要（和文）：1936年以降海外で開催された日本古美術展について国内および海外（欧米およびアジア）所在の関係資料を調査、1936年～2016年に開催された展覧会の一覧表を作成、いつどこでどのような展覧会が行われたか、概要を明らかにし、うち約600件をデータベース化してWEB上に公開した。また主な展覧会の詳細資料を分類・整理、海外における日本観とその変遷を考察・研究するための基礎資料を整備した。研究の過程で各地の関係分野の専門家との研究交流も進め、今後の研究に向けてネットワーク構築ができた。3年間の研究活動記録は報告書として出版した。

研究成果の概要（英文）：By creating a list of post-1936 overseas exhibitions of Japanese art ranging from prehistory to the pre-modern period, as well as compiling and sorting materials from the most important of these exhibitions, this study serves as a fundamental source for conducting research on how Japan was perceived abroad and how these perceptions changed over time.
This research also resulted in the deepening of exchanges with specialists of Japanese art in US and European museums. Moreover, a record of the activities carried out in connection with this research was published.

研究分野：博物館学

キーワード：博物館学　芸術諸学　展示学　文化人類学　美術史学

１．研究開始当初の背景

日本の古美術品は、1862 年ロンドン万博でまとまって紹介されて以来、世界でさまざまに展示されてきた。当初西洋美術とは全く異なる「珍品」として興味を集めた古美術品は、明治期に日本政府が国の高い文化水準を示すものとして欧米の万国博覧会に出品、万博をきっかけに日本の古美術品への関心が高まり、フェノロサをはじめとして欧米人の日本美術研究者も現れた。現在では、ボストン美術館や大英博物館など欧米の博物館・美術館に質量ともに優れた日本美術コレクションが所蔵され、常設の展示室があり、専門の学芸員による研究・展示活動が行われている。

在外日本古美術品の所蔵状況や、海外における常設の日本展示については、国内外ですでにいくつかの先行研究がなされ、悉皆調査や国際シンポジウム等によって現状が把握されつつあった。また、日本の現代美術については、光山清子氏が「第二次世界大戦後に欧米で開催された日本の現代美術展の内容とその反響を検証」しリストも作成されていた(『海を渡る日本現代美術』2009 年)。一方、海外における日本古美術を主とした常設でない企画展覧会については、展覧会ごとに記録資料が保管されているものの、現代までの流れを総覧できる資料が整理されていなかった。各展覧会関係者の高齢化あるいは転職等により、記録が散逸し資料収集が困難になりかねない状況であった。

２．研究の目的

古美術品[註1]は国の文化を表す一形態であり、日本政府は日本の伝統文化の普及を目的に海外で日本古美術展を行ってきた。一方、海外の日本美術研究者は、自身の解釈で日本美術を紹介する展覧会を行っており、そうした展覧会への来場者は、それぞれの見方で作品に触れ、展覧会を通じて「日本」への印象を形成する。従って、海外における日本古美術展は、その企画主体、開催地、開催時期ごとに、ある「日本観」を形成してきたといえる。

本研究は、研究代表者および分担者のこれまでの研究成果と経験を元に、「企画展」という、短期間に多くの観客を集める事業およびその関連事業や関連報道によって、企画側の意図と実際の来場者の印象・反応を比較・分析し、古美術展によってどのような日本観が形成されるかについて、1939 年にドイツ・ベルリンで開催された「日本古美術展」（以下、「ベルリン展」）を出発点として現代（2016 年）に至るまで総合的に概観、開催実績としての全貌を把握することを目的とした。[註2]

具体的には、以下の 3 点を目的とした：

（１）1939 年から 2016 年の間に日本国外で開催された日本古美術の概要を把握する。

海外で開催された日本古美術展について、展覧会名、会期・会場、主催者、企画者（展覧会主担当者）、展覧会内容、主な出品作品、関連事業、関連報道等についての文献資料、記録写真を東京国立博物館、文化庁、国内関係博物館・美術館および開催館等のＷｅｂサイト上から網羅的に収集し、時系列に一覧できるデータとする。

（２）日本政府が主催した「海外日本古美術展」の全貌を明らかにする。

「ベルリン展」先行事例となった米国ボストンにおける 1936 年の「日本古美術展」以降日本国が主催して開催した「海外日本古美術展」の文献資料、関連文書、写真資料、関連記事を収集、整理することにより、過去の個別の展覧会についての研究成果を踏まえ、日本政府が各展覧会において日本美術、文化、ひいては日本をいかに提示したかを明らかにするとともに、それらの各開催地での受容の様子を考察する。

（３）欧米・アジアで行われた主な日本古美術展の詳細を明らかにする。

「ベルリン展」をはじめ、主な展覧会の会場館を訪問、当時の記録文書・写真および関係資料を収集、また可能な限り関係者に各展覧会についての面談調査を実施し、会場となった現地での開催意図と来場者の反応を探る。

また、展覧会後の研究活動・博物館活動の広がり、日本から得た作品・資料等の現在の活用状況について調査し、現在の日本美術研究の状況を把握することを目的とした。

註1　本研究においては、1868 年(明治維新)より前に日本で制作された文化財を日本古美術品として定義した。

註2　調査を始めたところ、当初本研究の始点とした 1939 年ドイツ・ベルリンで開催した「日本古美術展」（以下「ベルリン展」）の 3 年前に米国・ボストンで開催の「日本古美術展」が「ベルリン展」に影響を与えたとみられることから、この 1936 年の展覧会についても調査対象に加えることとした。

３．研究の方法

（１）国内訪問調査による資料収集・面談調査

主な訪問先：文化庁分室、京都国立博物館、国際日本文化研究センター、国立民族学博物館、大本山相国寺、日本経済新聞社　他

上記に加え、東京国立博物館が所蔵する資料調査を実施した。

（２）海外訪問調査による資料収集、面談調査

米国、中国（台湾含む）、ドイツ、スイス、イギリス、イタリア、オランダ、シンガポール、マレーシア　計 9 か国において現地調査を実施、計 40 機関の所蔵資料調査・視察および担当者への面談調査を実施した。

（３）過去の出版物および WEB サイト上での情報収集、整理。

欧米を中心として世界各地の主要な美術館が発行する年報や公式 WEB サイトを網羅的に調査・検索し、日本古美術が展示された展

覧会について情報を収集し、本研究の趣旨にあてはまる展覧会をリストアップして一覧表に加えた。

４．研究成果

（１）1936-2016 年に海外で開催された日本古美術を中心に構成した展覧会の一覧を作成、うち約 600 件についてデータベース化して公開した。データベースには参照した図書資料や関連文書についても記載した。これにより、戦前から現代までの海外における日本古美術展の概要が一望でき、文化財を通しての国のイメージ形成の一端を把握し、戦略構築に資することが可能となった。

（２）調査訪問先の研究員とのネットワーク構築により、各地で日本美術コレクションへの関心を喚起し、その重要性と利用価値について再認識されることとなった。また、今後の活用促進を図ることができ、将来の交流へとつながる日本美術研究のネットワーク作りの一助となった。

（３）さまざまな開催館での調査により、どこにどのような資料があるか所在が明らかになり、今後、企画展を通しての博物館学、展示学、さらに各国との交流実態を考えるための原資料を収集することができた。

国内では、主に文化庁分室所在の文化庁主催海外日本古美術展事業にかかる資料の調査により、会場風景写真、展覧会関連記事などをスキャン、デジタル化をおおむね完了した。加えて、国以外が企画・実施に深く関わった展覧会として、京都・相国寺と日本経済新聞社が主催した展覧会について、資料調査および面談調査を実施、国が主催する場合と同様、企画内容については日本側が主導する形で進むこと、展示手法についても概ね日本で古美術展を開催する場合と同様であることがわかった。

海外調査については、まずドイツとアメリカから現地調査をかいししたが、両国ともに、展覧会関係資料は、国あるいは開催館付属の文書館や各館内で展覧会ごとに整理され、外部の研究者も閲覧できるようになっていた。どの機関もメモ書きなどかなり細かいやりとりの様子もうかがえる資料が丹念に整理されており、研究資料として閲覧にも迅速に対応していることが大変印象的であった。その後調査したオランダ、スイス、イギリスの日本美術展を多く開催している博物館・美術館もおおむね展覧会関係資料を一括してアーカイヴ化し、研究目的の閲覧希望に効率よく対応していた。一方、イタリアについては、近年の展覧会以外は様子が分かる資料が一括管理されている様子はなかった。これは、近年イタリアの国立美術館の一部が企画展については指定管理者制度により外部の企画運営会社に委託していることが一因かもしれない。アメリカのスミソニアン研究所所属以外の美術館の多くは民間運営であるが、メトロポリタン美術館をはじめ、ボストン美術館、フィラデルフィア美術館など各館の展覧会のアーカイヴは専門のアーカイビストもしくはレジストラーや学芸の担当部署で整理・管理していた。展覧会関係資料は予想したよりもかなり多く現存しており、日本側との作品選定や展示会場を検討する過程での連絡文書が多く含まれる。作品選定については、多くの場合日本側が素案を作成、それに会場館が追加・変更の希望を出している。会場館からいわゆる「ドリームリスト」のような名品が希望され、それらの中から現実的に日本側が可能なものと、無理な場合は代替リストを出す、という現在の海外で開催する展覧会でもよくあるやり取りがみられる。その他、日本側から環境面（温湿度、展示ケースの仕様など）について要望を出している文書もあるが、それらの内容も現在作品を貸出す際の確認事項と同様である。さらに、展覧会の際に締結する協約書の内容も、現在日本側が提示する雛形の原型はすでに 1951 年サンフランシスコで開催された「日本古美術展」の協約書にみることができ、海外展の企画から実施運営の大要は、戦後から大きな変更はないとみられる。ただし、電子メールの普及により、1990 年代半ば以降の連絡調整にかかるやり取りは文書として見られない部分も増え、近年の記録についてはアーカイヴとしては見ることができなかった。

上記を含む研究成果の詳細は、2017 年 3 月末に報告書として出版した。うち本文については後日 WEB 上でも公開を検討している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

① YOSHIDA Kenji, SONODA Naoko, TAMURA Katsumi, Nu MRA ZAN eds. “Museum Exhibition Today, 2013,” Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar” *Senri Ethnologucal Reports* 125 号、査読無、2015 年 pp. 37-56

② 吉田憲司「シンポジウム・イメージの力再考」『民族藝術』31 号、査読無、2014 年、pp. 8-27

〔学会発表〕（計　3 件）

① 白井克也「館史資料からみた東京国立博物館と外国博物館との文化財交換　The History of the Exchanges of the Cultural Objects between the Tokyo National Museum in Foreign Countries」Center for East Asian Studies, The University of Pennsylvania、2017 年 2 月 3 日、米国・ペンシルヴェニア大学

② 田良島哲「『もの』としての文化財写真」アート・ドキュメンテーション学会、2016年6月11日、奈良国立博物館講堂
③ 鬼頭智美 “New Trends/ New Markets for International Exhibition Tours Organizing Exhibitions in/with China,” International Exhibition Organizers, 2015年4月23日、米国ニューヨーク近代美術館

〔図書〕（計　4件）
① 鬼頭智美、高橋裕次、田良島哲、白井克也、楊鋭、吉田憲司ほか『海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究』東京国立博物館、2017年、108ページ
② 吉田憲司『仮面の世界をさぐる―アフリカとミュージアムの往還』臨川書店、2016年、256ページ
③ 白井克也ほか「東京国立博物館所蔵のギリシャ関係資料」『古代ギリシャ―時空を超えた旅』朝日新聞社ほか、2016年、404ページ
④ 吉田憲司（神戸女子大学古典芸能研究センター編）「人類学の視点から見る仮面―仮面という装置が明かす人類の普遍性」『能面を科学する―世界の仮面と演劇』勉誠出版、2015年344（151-171）ページ

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
「海外で開催された日本古美術展データベース」東京国立博物館研究情報アーカイブズ
http://webarchives.tnm.jp/infolib/meta_pub/G0000002K26282074

６．研究組織
(1)研究代表者
鬼頭　智美（KITO Satomi）東京国立博物館・学芸企画部・室長

研究者番号：80321553

(2)研究分担者
高橋　裕次（TAKAHASHI Yuji）東京国立博物館・学芸研究部・課長

研究者番号： 00356271

白井　克也（SHIRAI Katsuya）東京国立博物館・学芸研究部・室長

研究者番号：70300689

吉田　憲司（YOSHIDA Kenji）国立民族学博物館・教授

研究者番号：10192808

田良島　哲（TARASHIMA Satoshi）東京国立博物館・学芸企画部・課長

研究者番号：60370996

横山　梓（YOKOYAMA Azusa）東京国立博物館・学芸企画部・研究員

研究者番号：00596736

楊　鋭（YANAGI Ei）東京国立博物館・学芸企画部・主任専門職

研究者番号：00584476

(3)連携研究者

(4)研究協力者
浅見　龍介（ASAMI Ryusuke）東京国立博物館・学芸企画部・課長

吉村　玲子（YOSHIMURA Reiko）米国スミソニアン研究所フリーア美術館図書館長

アレクサンダー・ホーフマン（Alexander Hofmann）ドイツ・ベルリンアジア美術館日本美術担当学芸員

森嶋　由紀（MORISHIMA Yuki）米国・サンフランシスコ・アジア美術館日本美術担当学芸員